

怨靈借用

泉鏡花作

一

婦人は、座の傍に人氣のまるでない時、ひとりでは按摩を取らないが可いと、昔氣質の誰でも然う云ふ。上は然までもない。あの下の事を言ふのである。聞では別段に注意を要するだらう。以前は影繪、うつし繪などでは、巫山戯たその光景を見せたさうで。

——御新姐さん、……奥さま。……

さ、お横に、と此から腰を揉むのだが、横にもすれば、俯向にもする、一つくるりと返して、ふはりと柔く又横にもしよう。水々しい魚は、眞綿、羽二重の俎に寝て、術者はまな箸を持たない料理人である。衣を透して、肉を揉み、筋を萎すのであるから恍惚と身うちが溶ける。ついたしなみも粗末に成つて、下じめも解けかゝれば、帯も緩くなる。きちんとして居てさへ雑と此の趣。……遊山旅籠、温泉宿などで寐衣、浴衣に、扱帯、伊達巻一つの時の様子、略……お互に、しなくつても可いが想

像^うが出来^{でき}る。膚^{はだ}を左右^{さいう}に揉^もむ拍子^{ひやうし}に、所謂^{いはゆる}青練^{あをねり}も溢^{こぼ}れようし、緋^ひ縮緬^{ぢりめん}も友染^{いっせん}も敷^しいて落^おちよう。按摩^{あんま}をされる方^{かた}は、對手^{あひて}を盲^{めくら}にして居^ゐる。其處^{そこ}に姿^{すがた}の油斷^{ゆだん}がある。足^{あし}くびの時^{とき}なぞは、一應^{おう}は職業^{しむくぎやう}行儀^{ぎやうぎ}に心得^{こころえ}て、太脛^{ぶくろはね}から曲^まげて引上^{ひきあ}げるのに、すんなりと衣服^{きもの}の褌^{つま}を卷^まいて包^つむが、療治^{れうぢ}をするうちには雙方^{さうほう}の氣^きのたるみから、踵^{かかと}を摺^{すり}下^{さが}つて褌^{つま}が波^{なみ}のやうにはらりと落^おちると、包^つましい膝^{ひざ}のあたりから、白^{しろ}い踵^{かかと}が、空^{そら}にふら／＼となり、しな／＼として、按摩^{あんま}の手の裡^{うち}に絲^{いと}の亂^{みだ}るゝが如^{ごと}くに纏^{もつ}れて、艶^{えん}に媚^{なまめ}かしい上^う搔^かい、下^{した}搔^かい、たゞ卍^{まんじ}巴^{ともゑ}に降^ふる雪^{ゆき}の中^{なか}を倒^{さかし}に歩^{ある}行く風^{ふぜ}情^いに成^なる。バツタリ眞暗^{まつくら}に成^なつて、
・ ・ ・ ・ 影繪^{かげゑ}は消^きえたものださうである。

ー ー 聞^きくにつけても、たしなむべきであらうと思^{おも}ふ。 ー ー

が、これから話^{はな}す、わが下町娘^{したまちつこ}のお桂^{けい}ちゃん ー ー
いまは嫁^かして、河崎夫人^{かはさきふじん}であるのに、此^この行爲^{かうゐ}、
此^この状^{じやう}があつたと言^いふのでは決^{けつ}してない。

問題もんだいに觸ふれるのは、お桂けいちゃんの母親ははで、もう一
昨年さくねん頃ころ故人なきひとの數かずに入はいつたが、照降町てりふりちやうの背負商しよひあきなひから、
やがて宗右衛門町そうゑもんちやうの角地面かどぢめんに問屋とんやと成なるまで、その
大島屋おほしまやの身代しんだい八分ぶは、其その人ひとの働はたらきだつたと言いふ。
體量たいりやうも二十一貫くわんづゝしりとした太腹ふとつぽりで、女長兵衛をんなちやうべゑと
稱たへられた。――末娘すゑつこで可愛かはいいお桂けいちゃんに、
小遣こづかひの出振だしつぶりが面白おもしろい。……小買こがひものや、芝しば
居ゐへ出でかけに、お母かあさんが店頭みせさきに、多人數たにんす立働たちはたく小
僧うぢぞう中ちゆう若衆わかしゆたちに、氣きは配くばつても見みないふりで、くゝ
り頤あこの福々ふく／＼しいのに、圓々まる／＼とした兩肱りやうじゆうの類杖るいじゆうで、薄うす
眠ねむりをして居ゐる、一段高だんだかい帳場ちやうばの前まへへ、故わざと澄すまし
た顔かほして、「お母かあさん、少すこしばかり。」默だまつて金かね
箱はこから、づらりと摘出つかみだして渡わたすのが、掌てのひらが大大おほく、
慈愛じあいが餘あまるから、……瘦やせぎすで華奢きやしゃなお桂けいち
やんの片手かたてでは受切うけきれない、兩りやうの掌てのひらに積つんで、銀貨ぎんくわ
の小粒こつぐなのは指ゆびからざら／＼と溢こぼれたと言いふ。……
……亡なきあとでも、その常用じゆうじゆうだつた粗末そまつな手てぶん
この中なかに、なほざりに一寸半紙ちちよつとはんしに包つんで、（桂坊けいぼう
へ、）といけぞんざいに書かいたものを開あけると、
水晶すいしゆうの淨土珠じやつじゆず數一聯れん、とつて十九じゆうのまだ嫁入前よめいりまへの娘むすめ
に、と傍はたで思おもつたのは大違おほちがひ、粒つぶの揃そろつた百幾顆いっくつの、

皆眞珠であつた。

姉娘に養子が出来て、養子の魂を見取つてからは、いきぬきに、時々伊豆の湯治に出掛けた。――この温泉旅館の井菊屋と云ふのが定宿で、十幾年來、馴染も深く、殆ど親類づき合ひに成つて居る。その都度秘藏娘のお桂さんの結綿島田に、緋鹿子、匹田、絞の切、色の白い細面、目に張のある、眉の優しい、純下町風俗のを、山が育てた白百合の精のやうに、袖に包んで居たのは言ふまでもない。……

「……其の大島屋の先の大きいおかみさんが、ごふびんに思召しましてな。……はい、え、右の小僧按摩を――小一と申したでござりますが、本名で、まだ市名でも、齋號でもござりません、……見た處が餘り小こいので、お客様方には十六と申す事に、師匠も言ひきけてはありますし、當人も、左様に人様には申して居りましたが、此の川の下流の釜ヶ淵――いえ、もし、渡月橋で見えます白絲の瀧の下の……あれではござりません。もつとづくと下流に成ります。――

その釜ケ淵へ身を投げました時、――小一は二十で、従つて色氣があつたでござりますよ。」

「二十にならなくつたつて、色氣の方は大丈夫あるよ。――私が手本だ。」

と言つて、肩を揉ませながら、快活に笑つたのは、川崎欣七郎、お相ちゃんのお夫で、高等商業出の秀才で、銀行員のいゝ處、年は四十だが若々しい、年齢に些と相違はあるが、此の縁組に申分はない。次の室つき井菊屋の奥、香都良川添の十疊に、もう床を並べて、膝まで沈むばかりの羽根毛蒲團に、ふつくりと、たんぜんで寛いだ。

寢床を這つて、窓下の紫檀の机に、うしろ向きで、紺地に茶の縞お召の袷羽織を、撫肩にぞろりと掛け、道中の髪を解放し、あすあたりは髪結が来ようと言ふ櫛巻が、房りしながら、清らかな耳許に簪の珊瑚が薄色に透過る。……男を知つて二十四の、きぢの雪が一層あくが抜けて色が白。眉が意氣で、口許に情が籠つて、きりゝとしながら、一寸

お轉婆に片褙の緋の紋縮緬の崩れた媚かしさは、田舎源氏の――名も通ふ――桂樹と云ふ風がある。

お桂夫人は知らぬ顔して、間違つて、愛讀す

る・・・泉の作で「山吹」と云ふ、まがひものゝ戯曲を、軽い頬杖で讀んで居た。

「御意で、へ、へ、へ、へ、」

と唯今の御前のおほせに、恐入つた體して、肩からずり下つて、背中でお叩頭をして、ポンと浮上つたやうに顔を擡げて、鼻をひこゝと行つた。この謙齋坊さんは、座敷は暖かだし、精を張つて、つかまつたから、十月の末だと云ふのに、むき身絞の襦袢、大肌脱に成つて居て、綿八丈の襟の左右へ開けた毛だらけの胸の下から、紐のついた大蝦蟇口を溢出させて、揉んで居る。

「で、旦那、身投げがござりましたから、其の釜ケ淵・・・これは唯底が深いと云ふだけの事でありませうで、以來其處を、提灯ケ淵――これは死にます時に、小一が冥途を照しますつもりか、

持つて居りましたので、それに、夕顔ヶ淵……
また此は、その小按摩に様子が似ました處から。」

「いや、其は大したものだな。」

くわ、とたゞ口を開けて、横向きに、聲は出さず
に按摩が笑つて、

「處が、もし、顔が黄色膨れの頭でつかち、えら
い出額で。」

「それぢやあ、夕顔の方で迷惑だらう。」

「御意で。」

と又一つ、ずり下りざまに叩頭をして、

「でござりますから瓢箪淵とでもいたした方が可
からうかとも申します。小一の顔色が青瓢箪を俯
向けにして、底を一つ叩いたやうな鹽梅と、わしど
も家内なども申しますので、はい、背が低くつて小
兒同然、それで、時々相修業に肩につかまらせた事
もござりますが、手足は大人なみに出來て居ります。

て、此これが療治れうぢに掛かりますと、希代きたいにのべつ、坐睡あねむりをするでござります。古來こらい、姑しゅうめの目ざといのと、按摩あんまの坐睡あねむりは、遠島えんたうものだといたしたくらゐなもので。」
とばち／＼ばちと指ゆびを弾はじいて、

「わしども覺おぼえがござります。修業しゆげふちう中小僧こせうのうちは、また其その睡ねむい事ことが、大蛇だいじやを枕まくらでござりますて。けれども小こ一いちのははげしいので……お客様きやくさまの肩かたへつかまりますと、——すぐに、其そのこくり／＼……先まづ、そのために生命いのちを果はたしましたやうな次第しだいでござりますが。」

「何かなにい、歩あるきながら、川かはへ落おつこちでもしたのかい。」

「いえ、其それは、身投みなげで。」

「あゝ、然さうだ、——此方こつちが坐睡あねむりをしやしな
いか。ぢや、客きやくから叱言こゝとが出て、親方おやかた……其その師匠ししやうにでも叱しかられたゝめなんだな。」

「……不ふ斷だんの事ことで……師匠ししやうも更あらためて

叱言を云ふがものはござりません。それに、晩も夜中も、坐睡つてばかり居ると申すでもござりませんでな。」

「そりや然うだらう。――朝から坐睡つて居るんでは、半分死んでゐるのも同じだ。」
と欣七郎は笑つて言つた。

「春秋の潮時でもござりませうか。――大島の大きいお上が、半月と、一月、づつと御逗留の事も毎度ありましたが、その御逗留中と云ふと、小一の、持病の坐睡が又激しく起ります。」

「ふ。――
と云つて、欣七郎はお桂ちゃんの雪の頸許に、擦つたさうな目を遣つた。が、夫人は振向きもしなかつた。」

「ために、主な出入場の、御當家では、方々のお客さんから、叱言が出ます。かれこれ、大島屋さんのお耳にも入りますな、おかみさんが、可哀相な盲

小僧だ。．．．．それ、十六七とばかり御承知
で．．．．肥満つて身體が大いから、小按摩一人
肩の上で寝た處で、蠅螂が留まったほどにも思はな
い。冥利として、たゞで、お錢は遣れないから、肩
で船を漕いで居なと、毎晩のやうに、お慈悲で療治
をおさせになりました。．．．．處が旦那。」

と暗い方へ、黒い口を開けて、一息して、

「何うも意固地な．．．．いえ、不思議なもの
で、其の時だけは小按摩が決して坐睡をいたさない
でござります。」

「その、おかみさんには電気でもあつたのかな。」

「へ、へ、飛んでもない。おかみさんのお傍には、
いつも、それは／＼綺麗な、美しいお嬢さんが、
大好きな、小説本を讀んで居るのでござります。」

「娘ツ子が讀むんぢやあ、どうせ碌な小説ぢやあ
るまいし、碌な娘ではないのだらう。」

「勿體ない。――香都良川には月がある、天城山には雪が降る、井菊の霞に花が咲く、と土地ではやしましたほどのお嬢さんでござりますよ。」

「按摩さん、按摩さん。」

と欣七郎が聲を刻んだ。

「は、」

「きみも土地ぢや古顔だと云ふが。ぢやあ、その座敷へも呼ばれたらうし、療治もしたらうと思ふが、どうだね。」

「は、それが、つい、おうはさばかり伺ひまして、お療治はいたしません、と申すが、此屋様なり、そのお座敷は、手前同業の正齋と申す……河豚のやうではござりますが、腹に一向の毒のない男が持分に承つて居りましたので、此の正齋が、右の小一の師匠なのでござりまして。」

「成程、しかし狭い土地だ。そんなに逗留をして居るうちには、きみなんか、その娘ツ子なり、おか

みさんを、途中で見掛けた。――いや、これは失禮した、見えなかつたね。」

「旦那、口幅つたうはござりますが、目で見ますより聞く方が確でござります。それに、それお通りだなど、途中で皆がひそ／＼遣ります處へ出會ひますと、芬とな、何とも申されません匂が。」

「……温泉から上りまして、梅の花を其……嗅ぎますやうで、はい。」

座には今、その白梅よりやゝ淡青い、春の李の薫がしたらう。

うつかり、ぷんと嗅いで、

「不躰け。」

と思はずしやべつた。

「其の香の好さと申したら、通りすがりの私どもさへ、寐しなに衣ものを着換へましてからも身うちが、ほんのりと爽いで、一晚、極樂天上の夢を見たでござりますで。一つ部屋で、お傍にでも居ました

ら、もう、それだけで、生命も惜うはござりますま
い。況して、人間のしひなでも、そこは血氣の若
い奴でござります。死ぬのは本望でござりましたら
うが、もし、それや、これやで、釜ヶ淵へ押はまつ
たでござりますよ。」

お桂の一寸振返つた目と合つて、欣七郎は肩越に
按摩を見た。

「ぢやあ、なにか其の娘さんに、かゝり合ひでも
あつたのかね。」

「飛んだ事を、お嬢さんは何も御存じではござりません。唯、死にます晩の、其の提灯の火を、お手づから點けて遣はされたゞけでござります。」

お桂は其のまゝ机に凭つた、袖が直つて、八口が美しい。

「其の晩も、小一按摩が、御當家へ、こつつり／＼と入りまして、お帳場へ、精靈棚からぶら下りましたやうに。——尤ももう時雨の頃で——その瓢箪頭を俯向けますと、「おい、霞の五番さん
ぢや、今夜御一療治はないぞ。」と、こちらに、年久しい、半助と云ふ、送迎なり、宿引なり、手代なり、……頑固で、それで一寸剽軽な、御存じかも知れません。威勢のいゝ、」

「あれだね。」

と欣七郎が云ふと、お桂は黙つて領いた。

「半助が然う申すと、びしや／＼と青菜に鹽に成りましたつけが、」それでは外様を伺ひます。」

「あゝ、行つて來な。内ぢやお座敷を廻らせないんだが、お前の事だ。」最も、（霞の五番さん）大島屋さんのお上さんの他には、好んで揉ませ人はござりません。――何處を何う廻りましたか、宵に來た奴が十時過ぎ、船を漕いだものが故郷へ立歸ります時分に、ぽかんと帳場へ戻りまして、畏つて、で、歸りがけに、」今夜は闇でございます、提灯を一つ。」と申したさうで、「おい、來た。」村の衆が出入りの便宜同様に、氣輕に何心なく出したげで。――此處がその、少々變な鹽梅なのでござりまして、先が盲だとも、盲だからとも、乃至、目あきでないと、そんな事は一向心着かず・・・それに、ひけ頃で帳場も一寸ごたついで居たでもござりませうか。其の提灯に火を點して遣らなかつたさうでござりますな。――後で話でござりますが。」

「おや／＼、しかし、ありさうな事だ。」

「はい、その提灯を霞の五番へ持つて参りました、小按摩が、逆戻りに。――「お桂様。」うちものは、皆お心安だてにお名を申して呼んで居ります。其處は御大家でも、お商人の難有さで、此がお邸づ……」

嚏の出損つた顔をしたが、半間に手を留めて、腸の如く手拭を手繰り出して、蝦蟇口の紐に搦むので、よぢつて俯むけに額を拭いた。意味は推するに難くない。

欣七郎は、金口を點けながら、
「構はない／＼、俺も素町人だ。」

「いえ、然う云ふわけではござりませんが。――其のお桂様に、「暗闇の心細さに、提灯を借りましたけれど、盲に何が見えると、帳場で笑ひつけて火を貸しません、何うぞお慈悲……お情に。」と、それ、不具根性、僻んだ事を申します。お上さんは、最うお床で、恚う目をぱつちりと見てござつたさうにござります。處で、お娘ごは何

の氣なしに點けてお遣りになりました。――さて、霞から、ずっと參れば玄關へ出られますものを、何う云ふものか、廊下々々を大廻りをして、此の……花から雪を掛けて千鳥に縫つて出ましたさうで。……井菊屋のしるしはござります、陰氣に灯して、暗い廊下を、黄色な鼠の霜がた小按摩が、影のやうに通ります。此の提灯が、やがて、其の夜中に、釜ヶ淵の上、土手の夜泣松の枝にさがつて、小一は淵へ、巖の上に革緒の足駄ばかり、と聞いて、お一方病人が出来ました。……

「あゝ、娘さんかね。」

「それは……いえ、お優しいお嬢様の事でござります……親しく出入をしたものが、身を投げたとお聞きなされば、可哀相――とは、……それはさ、思召したのでござりませうが、何の義理時宜に、お煩ひなさつて可いものでござります。病みつきましたのは、雪にござつた、獨身の御老體で。」

京阪地の方ださうで、長逗留でござりました。

「カチリ、」
と言つた。按摩には冴えた音。

「カチリ、へへツへツ。」
とベソを搔いた顔をする。

欣七郎は引入れられて、

「カチリ？・・・何うしたい。」

「お簪が抜けて落ちました音で。」

「簪が？・・・一寸。」

名は呼びかねつゝ注意する。

「いゝえ。」 婀娜な夫人が言つた。

「えゝ、滅相な・・・奥方様、唯今ではござ
りません。その當時の事で・・・上方のお客
が宵寐が覺めて、退屈さにもう一風呂と、お出かけ
なさる障子際へ、すら／＼と廊下を通つて、大島屋
のお桂様が。――と申すは、唯今の花、此のお
座敷、或はお隣に當りませうか。お娘ごには叔父ご
に成らつしやる、富澤町さんと申して兩國の質屋の
旦那が、一寸異なる寸法のわかい御婦人と御樂み、で、

大いお上さんは、苦い顔をしてござつたれど、其處は、長唄のお稽古ともだちか何かで、桂様は、その若いのと知合でおいでなさる。そこへーこゝでござります。．．．貴女のお座敷は、その時は別棟、向うの霞で。．．．此方へ遊びに見えませんでした。もし、そのお歸りがけなのでござりますて。

上方の御老體が、それなり開けると出會頭に成ります。出口が次の間で、もう床の入りました座敷の襖は暗し、又雪と申すのが御存じの通り、當館切つての北國で、廊下も、それは怪しからず陰氣ださうでござりますので、わしどもでも手さぐりでヒヤリとします。暗い處を不意に開けては、若いお娘ご、吃驚もなさらうと、ふと遠慮して立たつせえた。．．．お通りすがりが、何とも申されぬいゝ匂で、その香をたよりに、いきなり、横合の暗がりから、お白い頸へ噛りついたものがござります。．．．

「聲はお立てに成りません、が、お桂様が、少し

屈みなりに、颯と島田を横にお振りなすつた、その
時力チリと音がしました。思はず、えへんと咳をし
て、御老體が覗いてござつた障子の破れめへ其のまゝ
手を掛けて、お開けなさると、するりと向うへ、お
桂様は庭の池の橋がかりの上を、兩袖を合せて、小
刻みにおいでなさる。蝙蝠だか、蜘蛛だか、奴は、
それなり、その角の片側の寝具部屋へ、ごそりとも
言はず消えたげにござりますがな。

確に、カチリと、簪の落ちた音。お拾ひなすつた
間もなかつたがと、御老體はお目敏い。・・・
翌朝、氣をつけて御覽なさると、欄干が取附けてご
ざりませす、巖組へ、池から水の落口の、きれいな小
砂利の上に、巖の根に留まつて、きら／＼水が光つ
て、もし、小雨のやうにさします朝晴の日の影に、
あたりの小砂利は五色に見えます。此は、その簪の
橋が薬に抱きました、眞珠の威勢かにも申しますな。
水は浅し、拾ふのに仔細なかつたでございますれど
も、御老體が飛んだ苦勞をなさいましたのは・・・
・・夜具部屋から、膠々粘々と筋を引いて、時なり
ませぬ蛞蝓の大きなのが一匹・・・ずる／＼と

あとを輪取つて、舐廻つて、丁ど簪の見當の欄干の裏へ這込んだのが、屈んだ鼻のさきに見えました、

「――これには難儀をなすつたげで。はい、尤も、簪がお娘ごのお髪へ戻りましたに就いては、御老體から、大島屋のお上さんに、その邊のな、もし、従つて、小按摩もそれとなくお遠ざけになつたに相違ござりません、さ、さ、此の上方の御仁でござりますよ。――あくる晩の夜ふけに、提灯を持つた小按摩を見て、お煩ひなさつたのは。――御老體にして見れば、そこらの行が、り上、死際のめくらが、面當に形を顯はしたやうに思召しましたらうし、立入つて申せば、小一方でも、そのつもりでござりましたかも分りません。勿論、當のお桂様は、何事も御存じはないのでござります。第一、簪の力チリも、咳のえへんも、その御老體が、その後三度めにか四度めにか湯治にござつて、「もう、あの娘も、圓鬘に結はれたさうな。實は、」と此から帳場へも、つい出入のものへも知れ渡りましたでござります。――處が、大島屋のお上さんはおなくなりなさいます、あとで、お嫁入など、かた／＼、三年にも四年にも、薩張おいでがござりません。

尤もお榮え遊ばすさうで。……たゞ、もし、
此頃も承りますれば、その上方の御老體は、今年當
月も御湯治で、つい四五日あとにお立ちかへりださ
うでござりますが。――ふと、その方が御覽に
成つたら、今度のは御病氣どころか、其のまゝ氣絶
をなさらうかも知れませぬ。

――夜泣松の枝へ、提灯を下げまして、此
の……舊曆の霜月、二十七日でござります
な……眞の暗やみの薄明に、しよんぼりと踞
んで居ります。そのむくみ加減といひ、瓢箪頭のひ
しやげました工合、肩つき、そつくり正のもの其の
まゝだと申すことで……現に、それ。」

「えゝ。」
お桂もぞつとしたやうに振向いて肩をすばめた。

「わしどもが、此方へ伺ひます途中でも、もの好
きなのは、見て来た、見に行くと、高聲で往來が騒
いで居ました。」

謙齋の此の話の緒も、はじめは、その事からはじ

まった。

それ、谿川の瀬、池水の調べに通つて、チャンチキ、チャンチキ、鉦入りに、笛の音、太鼓の響が、流れつ、堰かれつ、星の静な夜に、波を打つて、手に取る如く聞えよう。

實は、此の温泉の村に、新に町制が敷かれたのと、山手に遊園地が出来たのと、名所に石の橋が竣成したのと、橋の欄干に、花電燈が点いたのと、従つて景氣が可いのと、儲るのと、唯その一つさへ祭の太鼓は賑ふべき處に、繁昌が合奏を演るのであるから、鉦は鳴す、笛は吹く、續いて踊らずには居られない。何年めかに一度と云ふ書入れ日がまた快晴した。

晝は屋臺が廻つて、この玄關前へも練込んで来て、藝妓連は地に並ぶ、雛妓たちに、町の小女が交つて、一様の花笠で、湯の花踊と云ふのを演つた。屋臺のまがきに、藤、菖蒲、牡丹の造り花は飾つたが、其の紅紫の色を奪つて目立つたのは、膚脱の緋より、帯の萌黄と、伊達巻の鬱金縮緬で。揃つて、むら兀

の白粉が上氣して、日向で、むら／＼と手足を動かす形は、菜畠であからさまに狐が踊った。チャンチキ、チャンチキ、田舎の小春の長閑さよ。

客は一統、女中たち男衆まで、擧つて式臺に立つたのが、左右に分れて、妙に隅を取つて、吹溜りのやうに重り合ふ。眞中へ拭込んだ大廊下が通つて、奥に、霞へ架けた反橋が庭のもみぢに燃えた。池の水の青く澄んだのに、葉ざしの日加減で、薄藍に、朧の銀に、青い金に、鯉の影が悠然と浮いて泳いで、見ぶつに交つた、ひとりお桂さんの姿を、肩を、襟を、帯腰を、彩つたものであつた。

此の夫婦は――新婚旅行の意味でなく――四五年來、久しぶりに――一昨日温泉へ着いたばかりだが、既に一週間も以前から、今日の祝日の次第、獻立書が、處々、紅の二重圈點つきの比羅に成つて、辻々、塀、大寺の門、橋の欄干に顯はれて、藝妓の屋臺囃子と、もに、最も注意を引いたのは、假装行列の催であつた。有志と、二重圈點、かさねて、飛入勝手次第として、祝賀委員が、審議の

上、その假装の優秀なるものには、三等まで賞金
美景を呈すとしたのに、読者も更めて御注意を願ひ
たい。

だから、踊屋臺の引いて歸る雛子の音に誘はれて、
お桂が欣七郎と、もに町に出た時は、橋の上で辨慶
に出會ひ、豆腐屋から出る緋緘の武者を見た。床屋
の店に立掛つたのは五人男の随一人、だてにさした
尺八に、雁がねと札を着けた。犬だつて浮かれて居
る。石垣下には、鷺が、ぐわい／＼と鳴立てた、が、
それは此の川に多い鶺鴒が、假装したものでない。

泰西の夜會の例に見ても、由來假装は夜のもので
あるらしい。委員と名のる、もの識が、そんな事は
心得た。行列は午後五時よりと、比羅に認めてある。
晝はかくれて、不思議な星の如く、颯と夜の幕を切
つて顯れる筈の處を、それらの英雄侠客は、髀肉の
歎に堪へなかつたに相違ない。かと思へば、桶屋の
息子の、竹を削つて大榭形に組みながら、せつせと
小僧に手傳はして、しきりに紙を貼つて居るのがあ
る。通りがかりの馬方と問答する。「おいらは留

めようと思つたが、此の景氣ぢやあ、とても引込んで居られない。「はあ、何に化けるね。」

「凧だ・・・黙つて居てくれよ。おいらが身體をそのまゝ大凧に張つて飛歩行くんだ。兩方の耳にうなりをつけるぜ。」

「魂消たの、一等賞づらえ。」

「黙つてゝくんろよ。」

馬がヒーンと嘶いた。此の馬が迷惑した。のそり／＼と歩行き出すと、はじめ、出會つたのは緋緘の武者で、続いて出たのは雁がね、飛んで来たのは辨慶で、争つて騎らうとする。揉みに揉んで、太刀と長刀が左右へ開いて、尺八が馬上に跳返つた。そのかはり横田圃へ振落された。

唯此のくらゐな間だつたが――山の根に演藝館、花見座の旗を、今日はわけて、山鳥の如く翻した、町の角の藝妓屋の前に、先刻の囃子屋臺が、大な蟲籠の如くに、紅白の幕のまゝ、寂寞として据つて、踊子の影もない。はやく町中、一練は練廻つて、剩す處がなかつたほど、温泉の町は、さて狭いのであつた。やがて、新造の石橋で列を造つて、町を巡りすました後では、揃つて此の演藝館へ練込んで、

すなは 乃ち放樂の亂舞となるべき、假装行列を待顔に、掃
きよ 清められた状の此のあたりは、軒提灯のつらなつた
なか 中に、却つて不斷より寂しかつた。

峰の落葉が、屋根越に ー ー

ひかげ 日蔭の冷い細流を、軒に流して、丁ど此の辻の向
かど 角に、二軒並んで、赤毛氈に、よごれ蒲團を繼はぎ
しやてき したやうな射的店がある。達磨落し、バツトの狙撃
とほ はつい通りだが、二軒とも、揃つて屋根裏に釣つた
いうれい 幽霊がある。弾丸が當ると、ガタリざら／＼と蛇腹
てんじやう に伸びて、天井から倒に、いづれも女の幽霊が、ぬ
あが け上つた青い額と、縹色の細い頭を、ひよる／＼毛
つきだ から突出して、背筋を中反りに蜘蛛のやうな手と
さかさま もに、ぶらりと下る仕掛けである。

「可厭な、あひかはらずね・・・」

けい お桂さんが引返さうとした時、歩手前の店のは、
しらはり 白張の暖簾のやうな汚れた天蓋から、捌髪の垂れ下
なか った中に、藍色の片頬に、薄目を開けて、片目で、
おきす 置据ゑの囃子屋臺を覗くやうに見て居たし、先鄰な

のは、釣上げた古行燈の破から、穴へ入らうとする
蝮の尾のやうに、かもじの尖ばかりが、ぶら／＼と
下つて居た。

歸りがけには、武藏坊も、緋緘も、雁がねも、一
所に床屋の店に見た。が、雁がねの臆面なく白粉を
塗りつゝ居たのは言ふまでもなからう。

―― 小一按摩のちびな形が、現に、夜泣松の枝
の下へ、假装の一個として顯れて居る――
按摩の謙齋が、療治しつゝ欣七郎に話したのは
―― 其の夜、食後の事なのであつた。

「半助さん、半助さん。」
 すら／＼と、井菊の廣い帳場の障子へ、姿を見せたのはお桂さんである。

あの奥の、花の座敷から来た途中は――― 此家
 での北國だと言ふ――― 雪の廊下を通つた事は言
 ふまでもない。

力チリ

ハツと手を舉げて、珊瑚の六分珠をおさへながら、
 思はず膠についたやうに、足首からむす／＼して、
 爪立つたなり小褌を取つて上げたのは、謙齋の話の
 舌とゝもに、蛞蝓のあとを踏んだからで、スリツパ
 を脱ぎ放しに釘でつけて、身ぶるひをして衝と抜い
 た。湯殿から蒸しかゝる暖い霧も、其處で、さつと
 肩に消えて、池の欄干を傳ふ、緋鯉の鱗のこぼれかゝ
 る眞白な足袋はだしは、素足より尚ほ冷い。
 で・・・・霞へ渡る反橋を視れば、そこへ島田に
 結つた初々しい魂が、我身を抜けて、うしろ向きに、
 氣もそゞろに走る影がして、ソツと肩をすぼめたな

りに、兩袖を合せつゝ呼んだのである。

「半助さん……」こゝで踊屋臺を視た、
畫の姿は、鯉を遊ばせた薄もみぢのさゞ波であつた。
いまは、その跡を慕つて大鯰が池から雫をひた／＼
と引いて襲ふ氣勢がある。

謙齋の話は、あれから尚ほ續いて、小一の顯はれ
た夜泣松だが、土地の名所の一つとして、繪葉書で
賣るのとは場所が違ふ。それは港街道の路傍の小山
の上に枝ぶりの佳いを見立てたので。――眞
の夜泣松は、汽車から来る客たちの此の町へ入る本
道に、古い石橋の際に土をあはれに装つて、石地藏
が、苔蒸し、且つ碎けて十三體。それ／＼に、櫛、
線香を手向けたのがあつて、十三塚と云ふ……
・一揆の頭目でもなし、戦死をした勇士でもな
い。きいても氣の滅入る事は、むかし大饑饉の年、
近郷から、湯の煙を慕つて、山谷を這出て來た老若
男女の、救はれずに、菜色して餓死した骨を拾ひ集
めて葬つたので。その塚に沿つた松なればこそ、夜

泣松と言ふのである。――晝でも泣く。――
假装した小按摩の妄念は、其の枝下、十三地藏と
は、間に水車の野川が横に流れて石橋の下へ落ちて、
香都良川へ流込む水筋を、一つ跨いだ處に、黄昏か
ら、もう提灯を釣して、裾も濡れさうに、ぐしやり
と踞んで居る。

今度出来た、谷川に架けた新石橋は、丁ど地藏の
斜向ひ。でその橋向うの大旅館の庭から、假装は約
束の如く勢揃をして、温泉の町へ入つたが――
然う云つては如何だけれど、饑饉年の記念だから、
行列が通るのに、四角な行燈も肩を圓くして、地藏
前を半輪によけつゝ通つた。……其のあとへ、
人魂が一つ離れたやうに、提灯の松の下、小按摩の
妄念は、列の中へ加はらずに孤影瑩然として残つて
居る。

ぬしは分らない、假装であるから。いづれ有志の
一人と、假装なかまで四五人も誘つたが、一寸手を
引張つても、いやその手を引くのが不氣味なほど、
正のものゝ身投げ按摩で、びくとも動かないで居

る。……と言ふのであつた。

「此を云つた謙齋は、しかし肝心な事を言ひ
わすれた、あとで分つたが、誘ふにも、同行を促す
にも、なかがまが交も聲を掛けたのに、小按摩は、お
くびほども口を利かない。「ぴい、ふう。」舌
のかはりに笛を。「ぴいふう」と唯笛を吹いた。

「

半ば聞ずてにして、すつと袖の香とゝもに、花の
座敷を抜けた夫人は、何よりも先に其の眞偽のほど
を、――そんな事は遊びすぎだし一番明い――

半助に、あらためて聞かうとした。懸念に處する、
此がお桂の此の場合の第一の手段であつたが。・

・

居ない。

「おや、居ないの。」

一層袖口を引いて襟冷く、少しこども腰に障子の
小間から覗くと、鐵の大火鉢ばかり、誰も見えぬ。

「まあ。」

式臺わきの横口にかう、ひよこりと出るなり、モ一
ニングのひよろりとしたのが、ト先づシルクハット
を取つて高慢に叩頭したのは

「あら。」

附髻をした料理番。並んで出たのは、玄關下足
番の好男子で、近頃夢中に成つて居るから思ひつい
た、頭から顔一面、厚紙を貼つて、胡粉で潰した、
不斷女の子を惱ませる罪城しに、眞赤に塗つた顔な
りに、乃ちハートの一である。眞赤な中へ、おどけ
て、舌を出しておじぎをした。

「可厭だ。．．．一寸、半助さんは。」

「あいつは、もう。」

揃つて二人とも又おじぎをして、

「晝間つから行方知れずで。」

と口々に云ふ處へ、チャンチキ、チャンチキ、どゞ
どん、ヒューラが、直ぐ其處へ。――女中の影

がむら／＼と帳場へ湧く、客たちもぞろ／＼出て来る。．．．．血の道らしい年増の女中が、裾長にしよる／＼しつゝ、トランプの顔を見て、目で嬌態をやつて、眉をひそめながら肩でよれついたので、入交つて、門際へどつと駈出す。

夫人も、つい誘はれて門へ立つた。

高張、弓張が門の左右へ、掛渡した酸漿提灯も、燦と光が増したのである。

桶屋の凧は、もう唸つて先へ飛んだらう。馬二頭が、鼻あらしを霜夜にふつ／＼と吹いて曳く囃子屋臺を真中に、礮ニたる石ころ路を、坂なりに、大道のいろはの辻のあたりから、次第さがりに人なだれを打つて来た。辨慶の長刀が山鉾のやうに、見える、見える。御曹子は高足駄、おなじやうな桃太郎、義士の数が三人ばかり。五人男が七人居て、雁がねが三羽揃つた。．．．．チャンチキ、チャンチキ、ヒューラと囃して、がつたり、がくり、列も、もう亂れ勝で、晝の編笠をてこ舞に早がはりの藝妓だちも、微酔のいゝ機嫌。青い髭も、白い顔も、紅を塗

つたのも、一齊にうたふのは鱒すくひの安來節である。中にぶツ／＼ぶツ／＼と喇叭ばかり鳴すのは、
―― 此は何處かの新聞でも見た―― 自動車
のつくりものを、腰にはめて行くのである。

時に、井菊屋は殆ど一方の町はづれにあるから、
村方へこぼれた祝場を廻り済して、行列は、此から
川向の演藝館へ繰込むの、いま丁ど退汐時。人は
一倍群つたが、向側が崖沿の石垣で、用水の流が急
激に走るから、推されて踏はずす憂があるので、群
集は残らず井菊屋の片側に人垣を築いた、め、背後
の方の片袖の姿斜めな夫人の目には、山から星まじ
りに、祭屋臺が、人の波に乗つて、赤く、光つて流
れた。

その影も、灯も、犬が三匹ばかり、まご／＼殿し
ながらついて、川端の酸漿提灯の中へぞろ／＼と黒
くなつて紛れたあとは、イんで見送る井菊屋の人た
ちばかり。早や内へ入るものがあつて、急に寂しく
なつたと思ふと、一足後れて、暗い坂から、――
異形なものが下りて来た。

疣々打つた鐵棒をさし荷ひに、桶屋も籠屋も手傳
つたらう、張抜らしい眞黒な大釜を、蓋なしに擔い
だ、牛頭、馬頭の青鬼、赤鬼。青鬼が前へ、赤鬼が
後棒で、可恐しい面を被つた。縫ひぐるみに相違な
いが、あたりが暗くなるまで眞に迫つた。．．．．
大釜の底にはめら／＼と眞赤な炎を彩つて燃して居
る。

青鬼が、

「ぼう／＼、ぼう／＼、」

赤鬼が、

「ぐらツ／＼、ぐらツ／＼。」

と陰氣な合言葉で、國境の連山を、黒雲に背負つ
て顯れた。

青鬼が、

「ぼう／＼、ぼう／＼、」

赤鬼が、

「ぐらツ／＼、ぐらツ／＼。」

よくない酒落だ。　　ー　　が、譯がある。．．．

・前まへに一度、此この温泉町のまちで、櫻桜の盛さかりに、假装會かせうくわいを催もよほした事ことがあつた。その時とき、墓はかを出でた骸骨がいこつを装よそほつて、出齒でっばをむきながら、卒堵婆そとばを杖つゑについて、ひよろ／＼、ひよろ／＼と行列ぎやうれつのあとの暗くらがりを縫ぬつて歩いて、女小兒をんなこどもを怯おびえさせて、それが一等賞とうじやうになつたから。

地獄ぢごくの釜かまも、按摩あんまの怨念をんねんも、それから思着おもひついたものだと思おもふ。一國こくの美術家びじゆつかでさへ模倣もほうを行やる、況いはんや村むらの若衆わかしゆに於おいてをや、よくない眞似まねをしたのである。

「ぼう／＼、ぼう／＼。」

「ぐらツ／＼、ぐらツ／＼。」

「あら、半助はんすけだわ。」

と、ひとりの若い女中ぢよちゆうが言いつた。

石いしを、青あをと赤あかい踵かかとで踏ふんで抜ぬけた二頭とうの鬼おにが、後うしろから、前まへを引ひいて、づし／＼／＼と小戻こもどりして、人ひと立たちの薄うすさに、植込うゑこみの常磐木ときはぎの影かげもあらはな、夫人ふじんの前まへへ寄よつて來きた。

赤鬼が最も著しい造聲で、

「牛頭よ、牛頭よ、青牛よ。」

「もうー、」

と牛の聲で應じたのである。

「やい、十三塚にけつかる、小按摩な。」

「もう。」

「これから行つて、釜へ打込め。」

「もう。」

「そりやー 歩べい。」

「もう。」

「あゝ、待つて。」

お桂さんは袖を投げて一歩して、

「待つて下さいな。」

と釜のふちを白い手で留めたと思ふと、

「お熱々。」

と退つて耳を壓へた。わきあけも、襟も、亂るゝ

姿は、電燭の霜に、冬牡丹の葉ながらくづるゝやうであつた。

四

「小一さん、小一さん。」

たとへば夜の睫毛のやうな、墨繪に似た松の枝の、
白張の提灯は—— 恚う呼んで、さしうつむいた
お桂の前髪を濃く映した。

婀娜にも優しい姿は、コートも着ないで、襟に
深く、黒に紫の裏すいた襟巻をまいたまゝ、むくん
だ小按摩の前に立つて、そと差覗きながら言つたの
である。

褌が幻のもみぢする、小流を横に、其の一條の水
を隔てゝ、今夜は分けて線香の香の芬と立つ、十三
地藏の塚の前には外套にくるまつて、中折帽を目深
く、欣七郎が杖をついてゐんだ。

（——） 實は、彼等が、こゝに夜泣松の下を訪
づれたのは、今夜これで二度めなのであつた——

はじめに。 . . . 話の一筋が齒に挟ったほどの事だけれど、でも、その不快について處置をしたさに、二人が揃つて、祭の夜を見物かた／＼、此處へ來た時は。 . . . 「何だ、あの謙齋か、按摩め。こくめで律儀らしい癖に法螺を吹いたな。」 其處には松ばかり、地藏ばかり、水ばかり、何の影も見えなかつた。空の星も晃々として、二人の顔も冴々と、古橋を渡りかけて、何心なく、薬研の底のやうな、此の横流の細瀧に続く谷川の方を見ると、岸から映るのではなく、川瀬に提灯が一つ映つた。

土地を知つた二人が、ふと之に心を取られて、松の方へ小戻りして、向合つた崖縁に立つて、谿河を深く透かすと、——こゝは、いまの新石橋が架らない以前に、對岸から山傳ひの近道するのに、樹の根、巖角を絶壁に刻んだ徑があつて、底へ下りると、激流の巖から巖へ、中洲の大巖で一度中絶えがして、板ばかりの橋が飛々に、一煽り翻つて落つる

白波のすぐ下流は、忽ち、白晝も暗闇を包んだ釜ヶ淵なのである。

その殆ど狼の食ひ散した白骨の如き假橋の上に、陰氣な暗い提灯の一つ灯に、ぼやり／＼と小按摩が蠢いた。

思ひがけない事ではない。二人が顔を見合せながら、目を放さず、立つうちに、提灯は此方に動いて、しばらくして一度ふはりと消えた。それは、巖の根にかくれたので、やがて、縁日ものゝ龍燈の如く、雑樹の梢へかゝつた、それは崖へ上つて街道へ出たのであつた。

「その時は、お桂の方が、衝と地藏の前へ身を躲すと、街道を横に、夜泣松へ小按摩の寄る處を、
「や、御趣向だなあ。」
と欣七郎が、のつけに快活に碎けて出て、
「疑ひなしだ、一等賞。」

小按摩は、何も聞かない振をして、蛙が手をニく

が如く、指で搜りながら、松の枝に提灯を釣すと、謙齋が饒舌つた約束の如く、そのまゝ、しよぼんと、根に踞んで、つくばひ立の膝の上へ、だらりと兩手を下げたのであつた。

「おい。一等賞君、おい一杯飲まう。一所に來たまへ。」

其の時だ。

「ぴい、ふう。」

笛を銜へて、唇を空さまに吹上げた。

「分つたよ、一等賞だよ。」

「ぴい、ふう。」

「さ、祝杯を上げようよ。」

「ぴい、ふう。」

空嘯いて、笛を鳴す。

夫人が手招きをした。何が故に、そのうしろに龍女の祠がないのであらう、塚の前に面影に立つた。

「ちえツ」 舌うちとゝもに欣七郎は、強情、我慢、且つ執拗な小按摩を見棄てゝ、招かれた手と肩を合せた、而して低聲をかはし、町の祭の灯の中へ、並んでスツと立去つた。

「ぴい、ふう。．．．．」

「小一さん。」

暫時して、引返して二人来た時は、さきにも言つた、欣七郎が地藏の前に控へて、夫人自ら小按摩に對したのである。

「ぴい、ふう。」

「小一さん。」

「ぴい、ふう。」

「大島屋の娘はね、幽霊に成つて了つたのよ。」
と一歩ひきさま、暗い方に隠れて待つた、あの射的店の幽霊を。片目で覗いて居た方のである。――竹棹に結へたなり、ずるりと出すと、ぶらりと下つて、青い女が、さばき髪とゝもに提灯を舐めた。その幽霊の顔とゝもに、夫人の黒髪、びん搔

に、當代の名匠が本質へ、肉筆で葉を黒漆一面に、緋の一輪椿の櫛をさしたのが、したゝるばかり色に立つて、却つて打仰いだ按摩の化ものゝ眞向に、一太刀、血を浴びせた趣があつた。

「一所に、おいでなさいな、幽霊と。」

水ぶくれの按摩の面は、いちじくの實の腐れたやうに、口をえみわつて、ニヤリとして、ひよろりと立つた。

お桂さんの考慮では、然うした……此の手段を選んで、小按摩を藝妓屋町の演藝館。……假装會の中心點へ送込まうとしたのである。然うして了へば、ねだ下、天井裏のばけものまでもない……雨戸の外の葉裏に居ても氣味の悪い芋蟲を、銀座の眞中へ押散したも同然で、あとは、さば／＼と寐覺が可い。

……思ひつきで、幽霊は、射的店で借りた。――欣七郎は紳士だから、さすがにこれは阻ん

だので、かけあひはお桂さんが自分でした。毛氈に片膝のせて、「私も假装をするんですわ。」令夫人と雖も、下町娘だから、お祭り氣は、頸脚に幽な、肌襦袢ほどは紅に膚を覗いた。

もう容易い。……つくりものゝ幽霊を眞中に、小按摩と連立つて、お桂さんが白木の兩ぐりを町に鳴すと、既に、まばらに、消えたもあり、消えさうなのもある、軒提灯の蔭を、つかず離れず、欣七郎が護つて行く。

藝妓屋町へ渡る橋手前へ、恰も巨寺の門前へ、向うから渡る地獄の釜。

「ばう／＼、ばう／＼。」

「ぐらツ／＼、ぐらツ／＼。」

「や、小按摩が来た……出掛けるには及ばぬわ、青牛よ。」

「もう。」

と、吠える。

「ぴい、ふう。」

「ばう／＼、ばう／＼。」

「ぐらツ／＼、ぐらツ／＼。」

其處で、一行異形もかは、驚の夢を踏んで、橋を渡つた。

鬼は、お桂のために心を配つて來たらしい。

演藝館の旗は、人の顔と、頭の中に、電飾に輝いた。……町の角から、館の前の廣場へ轟と詰つて、露臺に溢れたからである。此時は、軒提灯のあと始末と、火の用心だけに家々に残つたものゝほか、町を擧げてこゝへ詰掛けたと言つて可い。

そのかはり、群集の一重うしろは、道を白く引いて寂然として居る。

「おう、お嬢さん……そいつを持ちます、俺の役だ。」

赤鬼は、直ちに半助の地聲であつた。

按摩の頭は、提灯とにも、人垣の群集の背後に
ついた。

「もう、要らないわ、此店へ返して、ね。」
と言った。

「青牛よ。」

「もう。」

「生白い、いゝ肴だ。釜で煮べい。」

「もう。」

館の電飾が流るゝやうに、町並の飾竹が、櫻のつ
くり枝とにも颯と鳴った。更けて山嵐がしたので
ある。

竹を掉抜きに、たとへば串から倒に幽霊の女を釜
の中へ入れようとした時である。砂礫を捲いて、地
を一陣の迅き風がびゆうと、吹添ふと、すつと抜け
て、軒を斜に、大屋根の上へ、あれ／＼、もの干を
離れて、白帷子の裾を空に、幽霊の姿は、煙筒の煙
が懐手をしたやうに、遙に虚空へ、遙に虚空へ――

群集ぐんしふはもとより、立溢たちあふれて、石いしの點頭うなづくが如ごとく、
踞かゞみながら視みて居ゐた、人々ひと々は、羊ひつじの如ごとく立たつて、あ
ツと言いつた。

小一こ按摩あんまの妄念まうねんも、人混ひとこみの中なかへ消きえたのである。

土地の風説に残り、ふとして、浴客の耳に傳ふる處は……此だけであらうと思ふ。

しかし、少し餘談がある。とにかく、お桂さんたちは、來た時のやうに、一所に二人では歸らなかつた。――

風に乗つて、飛んで、宙へ消えた幽霊のあと始末は、半助が赤鬼の形相のまゝで、蝙蝠を吹かしながら、射的店へ話をつけた。此奴は禪にするため、野良猫の三毛を退治で、二月越内證で、もの置で皮を乾したさうである。

笑話の翌朝は、引續き快晴した。近山裏の谷間には、初茸の残り、乾びた占地茸もまだあるだらう、山へ行く浴客も少くなかつた。

お桂さんたちも、そゞろ歩行きした。掛稻に嫁菜の花、大根畑に霜の濡色も暖い。

畑中の坂の中途から、巨刹の峰におはす大観音に詣でる廣い道が、松の中を上りになる山懷を高く延つて、枯草葉の徑が細く分れて、立札の道しるべ。勸喜天御堂、と指して、……福徳を授け給ふ……と記してある。

「福徳つて、お金ばかりぢやありませんわ。」

欣七郎は朝飯前の道がものういと言ふのに、一寸軽い小競合があつたあとで、參詣の間を一人待つ事になつた。

「こゝを、……わきへ去つては可厭ですよ……一人ですから。」

お桂さんは勢よく乾いた草を分けて攀ぢ上つた。欣七郎の目に、其の姿が雑樹に隠れた時、夫人の前には再びやゝ急な石段が顯はれた。軽く喘いで、其を上ると、小高い皿地の中窪みに、垣も、折戸もない、破屋が一軒あつた。

出た、山の端に松が一樹。幹のやさしい、その見晴しで、一寸下に待つ人を見ようと思つたが、上つて来た方は、紅蕨と粉壁と、そればかりで夫は見えない。あと三方はまばらな農家を一面の畑の中に、弘法大師奥の院、四十七町いろは道が見えて、向うの山の根を香都良川が光つて流れる。わけへ引込んだ、あの、辻堂の小さく見える處まで、昨日、午ごろ夫婦で歩行いた、——却つて其處に、欣七郎の中折帽が眺められるやうである。

あゝ、今朝も其のまゝな、野道を挟んだ、飾竹に祭提灯の、稲田づれに、さら／＼ちら／＼と風に揺れる處で、欣七郎が巻煙草を出すと、燐寸を忘れた。……道の奥の方から、帽子も被らないで、土地のものらしい、霜げた若い男が、蠟燭を一束買つたらしく、手にして来たので、湯治場の心安さ、遊山氣分で聲を掛けた。

「一寸、燐寸はありませんか。」

ぼんやり立停つて、二人を熟と視て、
「はい、私どもの袂には、あつても人魂でして
な。」

すた／＼と分れたのが、小上りの、畦を横に切れ
て入つた。

「坊主らしいな。・・・提灯の蠟燭を配るの
かと思つたが。」
俗ではあつたが、うしろつきに、欣七郎が然う云
つた。

然う言つた笑顔に。――自分が引添うて居る
やうで、現在、朝湯の前でも乳のほてり、胸のとき
めきを幹でおさへて、手を遠見に翳すと、出端のあ
し許の危さに、片手を其の松の枝にすがつた、浮腰
を、朝風が美しく吹靡かした。

しさつて褌を合せた、夫に對する、若き夫人の優
しい身だしなみである。

まさか、此の破屋に、―― いや、此の松と、それより梢の少し高い、對の松が、破屋の横にやゝ又上坂の上にあつて、根は分れつゝ、枝は連理に連つた、濃い翠の色越に、額を捧げて御堂がある。

夫人は衣紋を直しつゝ近着いた。

近づくと、

「あツ、」

思はず、忍音を立てた―― 見透す六尺ばかりの枝に、倒に裾を巻いて、毛を蓬に落ちかゝつたのは、虚空に消えた幽霊である。唯見ると顔が動いた、袖へ毛だらけの脚が生え、脇腹の裂目に獣の尾の動くのを、狐とも思はず、氣は確に、しかと犬と見た。が、人の香を慕つたか、そばへて幽霊を噛みちらし、まつはり振つた、そのまゝで、裾を曳いて、ずるゝと寄つて來るのに、はらゝと、慌しく踵を返すと、坂を落ち下りるほどの間さへなく、帶腰へ疾く附着いて、ぶるりと觸るは、髪か、顔か。

花の吹雪に散る如く、裾も袖も輪に廻つて、夫人

は朽ち腐れた破屋の縁へ飛継つた。

「誰か、誰方か、誰方か。」

「うゝ、うゝ。」

と寝惚聲して、破障子を開けたのは、頭も、顔も、其のまゝの小一按摩の怨念であつた。

「あれえ。」

聲は死んで、夫人は倒れた。

此の聲が聞えるのには間遠であつた。最愛最惜の夫人の、消息の遅さを案じて、急心に草を攀ぢた欣七郎は、勸喜天の御堂より先に、たとへば孤屋の縁外の缺けた手水鉢に、ぐつたりと頤をつけて、朽木の臺にひざまづいて継つた、青ざめた幽霊を見た。

横ざまに、杖で、敲き拂つた。が、人氣勢のする破障子を、及腰に差覗くと、目よりも先に鼻を撲つた、此のふきぬけの戸障子にも似ず、したゝかな酒の香である。

酒さけぎらひな紳しんし士は眉まゆをひそめて、手巾ハンケチで鼻はなを蔽おほひながら、密そつと再ふたゝび覗のぞくと齊ひとしく、色いろが變かはつて眞まつ蒼さをになつた。

竹たけの皮かはち散り、貧びんばふ乏どくり徳利ころがの轉なかつた中に、小こ一あん按摩まは、夫人ふじんに嚙かじりついて居ゐたのである。

讀よむ方かたは、筆ひつしや者が最さいしよ初いに言いつた或ある場ばあ合ひを、ごく内うち端はに想さう像ゾさるゝが可いい。

小こ一かさうに假か装さうしたのは、此この山やまの麓ふもとに、井い菊きく屋やの畠はたけの畑はたつくりの老らう僕ぼくと日ひ頃ころ懇こん意いな、一ひとり人ずみ棲すみの堂だう守もりであつた。

【完】